
ノー・ダウト・メモリー ～疑いなき 真実の 記憶～

錬金術師？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノー・ダウト・メモリー ～疑いなき 真実の 記憶～

【Nコード】

N2455BA

【作者名】

錬金術師？

【あらすじ】

ブッチ神父が世界を一巡させた際に発生したパラレルワールドの一つ。ジョースター家の血を僅かばかり引き継ぐ少年、黒糸 静丞は、ある日不思議な女性と出会う。そしてその日から、その少年の物語は一気に加速し始める／＼／＼この小説は、ジョジョ×リリなのクロスオーバーです。厨二乙な表現などもありますので、そういうものが苦手な方はブラウザバックをお願いいたします…；／＼／＼／＼前作を間違えて消してしまったという不具合が生じてしまい、新たに書き直すことにしました。ブレない駄文とgdgd

ストーリーは多めに読んでくねると嬉しいですよ・

序章：プロローグ（前書き）

これからよろしくお願いいたします（土下座）

序章：プロローグ

地面に危うく着きそうな程に長いポニーテールを揺らし、少年は一人で海鳴町の閑静な住宅街を歩いていた。

一見少女にも見えそうなのだが、それは本人が聞くと尋常じゃないくらいにキレるので、言わぬが花であろう。

「…」

機嫌良さそうに鼻歌を歌いながら歩いていると、不意に立ち止まり、バツと後ろを振り向く。

そこには住宅街の静かな道があるだけで、特に何もなく、誰もいなかった。

先程からそうである。

後ろには誰もいないハズなのに、後ろに誰かがいる、と自分の心が囁いてくるのである。

だが、実際に後ろを振り向いても誰もおらず、しかし、前を向いて歩くと後ろに誰かがいる気がしてならない。そんな事に対し、少年の心の内には若干のイライラと不安が押し掛かっていた。

「…相談だな、これは」

誰に言つてもなくつぶやくと、どこへ行くでもなくフラフラと歩き始める。

今日は土曜日。学校は休みで、学生にとっての心のオアシスの日だ。

大概の生徒は自分の用事を片付けたり、友達と遊んだりするものだが、生憎と少年にはやる事も友達も存在しない。

「今日はどこでヒマを潰すか…。悩むな」

ため息を吐きながら、ポケットから黒い二つ折りのサイフを取り出し、中身を見た。

残金10,0243円。小学生が持つには多すぎるような大金だが、少年にとってはこのくらいが普通なので、特になんら驚く事でもない。

月五千円のお小遣いなのだが、使い道といえば昼食くらいにしかない少年は、一年でその年のお年玉分くらいは貯める事ができる。

なので、唯一の肉親たる母親には、何度もお年玉はいららないと言っているのだが、それでも結局は強引に渡されてしまう。

一応これでも、結構な金額は使っている方なのだが、明日で小遣い日である。

「なんでこんな金が溜まるんかねえ」

世の学生が聞けば殴られそうなセリフを言い、ため息を吐いた時だった。

キーン…と、何かが鳴るような音が脳裏に響いた。

「?耳鳴りか…」

特に気にせずに歩くが、一歩踏み出す毎に耳鳴りは酷くなっている、遂には頭痛まで少年を襲い始める。

「ぐっ…っ…」

思わずといった様子で、少年は耳を塞ぐと、近くにある民家の壁に背中を預け、肩を動かして荒い呼吸を繰り返す。

「ッ！ハア…ハア…」（な…んだよ、これ）

急激な耳鳴りと頭痛に困惑しながら、少しでも心を落ち着かせようと 深呼吸 をする。

コオオオオオオと特徴的な呼吸音が聞こえてくると同時に、少しずつだが耳鳴りと頭痛がおさまっていくのが、少年にはわかった。

「なんとか…治まってきたか」（チツ。今朝から感じる違和感といい、今の耳鳴りと頭痛といい、なんで今日に限ってこんな事が連続して起こるんだよ）

少年は理不尽な怒りを覚えたが、このイライラをぶつける相手もないので、余計にイライラしてしまう。

そして、そのままイライラしながらズボンのポケットに手を突っ込んだその時だった。

「その坊や…」

不意に、横から声をかけられた。

慌てて横を見ると、そこには、アラブ辺りの女性が着ていそうな黒装束を身に纏った、身長の高い女性が立っていた。

服の上からもわかるその細いラインは、世の女性全てが羨ましがらるであろうことは確定であろう。

「な、なんだよ。あんた」

ありえないくらいに大人の色香を漂わせる女性に対し、急に声をかけられた少年は、ドキマギしながら返事を返す。

頬を若干ながら赤く染めたその顔は、充分に色っぽいのだが、当の本人は一切気づいた様子はなかった。

「あなた、共鳴 したわね」

「は？きよーめい？…今日は命日の略？それとも、今日が命日の略？」

「どっちも意味は変わらないわ。…そうね。音叉、と言えはわかる？」

「ああ。そりゃわかるさ」

「つまり、そういう事よ。あなたと私は同じ存在。今はまだ 目覚め の時ではないけど、時機に訪れるわ。あなたの 精神 が、あなたを守る刃を生み出す。それは スタンド と呼ばれている力。あなたの助けになるでしょう」

「目覚め？刃？スタンド？いったい何だそれ？」

「いずれわかるわ。あの男の目覚めとともに。あなたはその力を感ずる事ができる。でも、それを扱いきれるかどうか、それはあなた次第」

「……………」

女性の意味の分からない言葉の羅列に、少年の脳はオーバーヒート寸前だった。

もしもこの世界が漫画やアニメの世界ならば、頭から煙が出ても可笑しくはない。

「それじゃあ。楽しみにしてるわよ？黒条 静丞」

「え？…なんで俺の名前を！…あれ？」

去り際、少年、静丞の名前を言った女性に対し不信感を覚え、女性性が去った後の曲がり角を確認するが、そこには……

「いない？」

その女性の影も形もなかった。

一瞬、幻覚かと思つた静丞だが、地面にキラリと何か光る物を見つければ、そこへ向かつた。

そこにあつたのは、チエーンに通された簡単な造形のロケットだった。

「落し物が…？でも、ここを誰かが通つていたらあの女に気づくはず…。だとすればこれは、あの女が落とした物なのか？」

チャラ…、というチエーンの軽く擦れ合う音とともに手に伝わる鉄特有の冷たさは、これが現実であるということをし、静丞に知らしめていた。

「あの女…。いつたい」

静丞の困惑に満ちた声は、どこまでも晴れ渡る青い空へと吸い込まれていき、紺碧の彼方へと消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2455ba/>

ノー・ダウト・メモリー ~ 疑いなき 真実の 記憶 ~

2012年1月6日06時48分発行